

「夢のつばさ」学生ボランティア有志報告： 東日本大震災被災地訪問

【開催概要】

夢のつばさプロジェクト 2014 年秋の交流会前日の10月18日(土)、学生ボランティア有志12名が東日本大震災被災地を訪問して現状を学び、現地の方々のお話を伺いました。

【訪問場所&目的】

東日本大震災で親を亡くした子どもたちの支援を続ける団体の一員として、被災地での復興活動の様子や現状を学び、自らの目で確かめることをメインの目的として、気仙沼にあるリアスアーク美術館などを見学訪問、そして、被災地でお金を使うことで現地での復興に少しでも協力し貢献できればと、復興屋台気仙沼横丁も訪問しました。また、夜には被災現地でボランティア活動をしている宮城教育大学の学生さんとの交流の機会を設けました。

【復興屋台気仙沼横丁】

宮城県気仙沼の食材を積極的に使った飲食店とお土産や海産物を豊富に扱う鮮魚店など、気仙沼らしい22の店舗がひしめく横丁です。

どこのお店の方々も私たちを温かく迎えてくださいました。被災前は栄えていた気仙沼の様子や、被災から3年経過した現在、海沿いに位置する気仙沼は復興が進んでおらず、これからの生活に不安を抱えていらっしゃるなどをお聞きました。現在も気仙沼に住み続けていらっしゃる皆さんから、その土地の良さを教えていただくには少ない時間だったかもしれませんが、現地の皆さんの私たちへの温かいお心遣いのもとで、気仙沼の美味しい料理や特産品を堪能できて皆さんの復興への前向きな熱意を感じることができた時間でした。

【リアスアーク美術館】

この美術館には、学芸員の方々が自ら震災直後から2年間にわたって行った、被害記録調査活動によって得られた記録写真や被災物が多数展示されていました。あらかじめ連絡を取って訪れたので、実際に写真を撮った学芸員さん(山内泰宏氏)が丁寧に解説して下さいました。

山内さんは次のように語られ、被災した方たちの深い思いを改めて感じました。「東日本大震災という出来事を伝えていくための資料は膨大に存在するが、資料を残すだけでは伝えたことにはならない。重要なのはその資料をどう生かすかである。」「復興という言葉の意味は『再び興すこと。一度衰えたものを再び盛んにすること』という意味である。東日本大震災が発生し、半年もたたない時期から復興という言葉は使われていた。そして被災地で当たり前のように『復興が遅れている、復興が進んでない』と語られ、被災地以外から訪れる人々は『思ったよりも復興していない』と語る。2014年、被災から3年経ていまだ復旧できていない現在、復興などしているはずがない。震災以前と同じように、地域の全ての活動が盛んになり、地域の全ての人に心から笑顔が戻って初めて、

『ああ、復興したのかな・・・』と私たちは思えるのかもしれない。今、私たちが復興という言葉を使うとすれば、『復興を願って、復興を信じて、復興を目指して』という使い方だろう。」

一同、すさまじい震災の事実を切実に感じたと同時に、復興とは何なのかと改めて考える機会となりました。少しでも現状を知ることができてとても意義深かったと思います。

【宮城教育大学のボランティア学生さんとの交流】

夜は仙台市内で、宮城教育大学の方たち3名とお互いの活動や思いを話し合う交流会を行いました。

彼らの主な活動は、仮設住宅を訪問しさまざまなイベントの開催を行ったり、小学校に派遣されて、子どもと触れ合ったりすることだそうです。震災に対する思いや復興に協力しようとする真摯な姿勢に共感しました。意見交換の場面で、宮城教育大学の方が夢のつばさプロジェクトの活動について、「自分の大学の中の友達にも震災遺児がいて、その子も継続して会いに来てくれる関係をうれしいと言っていた。夢のつばさに参加する子どもたちにとって、あなた達のプロジェクトはそういう大切な場所なのではないか」と話してくれて、とてもうれしく思いました。また「児童・生徒たちの人数が極端に少なくなっている学校も多く、学生や子どもたち合わせて50人以上が参加するという環境は、普段できない遊びができるのでいい機会だと思う」と言う意見も出て、私たちは、自分達の活動が大規模であるという認識がなかったので、とても印象的でした。

子どもたちとの接し方について話し合い、以下を確認しあいました。夢のつばさプロジェクトの活動でも大切なポイントになると思うので、ボランティア学生たちで共有したいと思います。

- ・甘やかすのではなく、やるべきことをきちんとやらせることが大事。
- ・自分の意見を自分で言えるように促す、また言える環境を作る。
- ・衝突を避けすぎない。人数がいるからこそ生まれる切磋琢磨を良い形で経験させたい。

【被災地訪問企画の担当者から】

「復興」、「きずな」という言葉が氾濫していた震災直後は、日本中の人々が東北に注目していました。けれども、時間の経過もあって「被災地東北」が忘れられつつあるようです。今回、復興商店街に行ってそれを改めて感じ、外部からの支援や関心はそうそう長期には続かないのだと感じました。改めて、夢のつばさの活動の意義を強く認識し、長期的に夢のつばさの子どもたちと関わり続けて行きたいと思いました。子どもたちが経験した震災を忘れずに、支援を続けたいと思います。自分は今回初めて東北を訪れましたが、人の温かさや、ゆったりとした雰囲気にとっても心惹かれたので、また訪問の機会を作ろうと思います。これまで訪れることがなかった人たちも、是非、東北に関心を持ってほしいと願っています。